

山口県立萩美術館・浦上記念館

# H A G I |

HAGI URAGAMI MUSEUM MAGAZINE

# 萩

# 118

WINTER ISSUE  
2026



# 令和7年度 新収蔵作品紹介

今年度は、寄贈により「彫金」の人間国宝であった山本晃氏(1944-2024)が制作した金工作品52件を新しく収蔵しました。優れた作品群であることに加え、山本の作家活動初期から晩年までの変遷<sup>へんせん</sup>を見ることができる内容です。ここでは寄贈作品の魅力を紹介したいと思います。

## ▶▶ 彫金と山本晃のわざについて

「彫金」<sup>ちようきん</sup>とは、金属を素材に作品を制作する「金工」の一分野で、その金属とは金・銀・銅、またはこれらを混ぜた合金<sup>ごうきん</sup>のことを言い、表面を彫る、あるいは異なる金属<sup>そうがん</sup>を象嵌<sup>きりばめ</sup>するなどして文様や形で表現し、作品を作りあげるものです。

また、「人間国宝」は、重要無形文化財「〇〇」の保持者という名称で国が指定する者で、「〇〇」には山本のよに「彫金」などの分野名が示され、そのわざを保持している者(個人や団体)が対象となります。

山本が体得したわざがどのようなものか、彼の制作のうつりかわり(「制作のはじまり」「豊かな色彩」「極まるわざ」)とともに紹介したいと思います。

### 1. 制作のはじまり

山本は金工作品の制作をはじめた頃、銅を基調とした赤色の作品を作りました。彼が、制作の際に柱としたわざが「接合せ技法」<sup>はぎあわせぎほう</sup>や「象嵌技法」<sup>ぞうがんきりばめぎほう</sup>(切嵌象嵌)でした。このわざを使って表現された生き物や植物などをモチーフにしたデザインは作家活動初期段階からうかがえます。蝶やてんとう虫などの生き物は単なる表現ではなく、いきいきとした雰囲気を持ち、素材が金属であることを忘れさせるような魅力を放っています。このような作風は、作家人生を通して見られ、山本の自然を愛しむ気持ちはデザイン面での柱となっていたようです。



《接合せ蝶文銅花器》 1986年



《象嵌合子「森の宴」》 1986年

### 2. 豊かな色彩表現

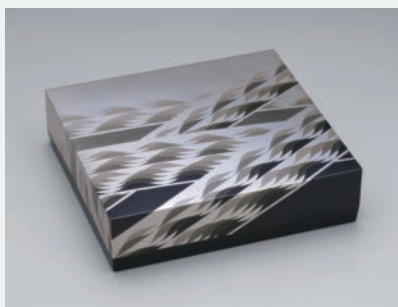
山本の作風は、銅を基調にした赤い作品から、「四分一」<sup>しぶいち</sup>を使った作品づくりへと変化していきます。四分一は、銀と銅の合金で、灰色系の色調をもつ金工作品の素材のひとつです。彼は、自分の思い描く作品を完成させるために素材づくりから行い、豊富な種類の四分一を基本にした色金<sup>いろがね</sup>をつくり出します。それは、銀と銅の配合比率を調整しながらいくつものテストピースをつくり、選りすぐったものでした。とくに、灰色の濃淡を段階的にレイアウトすることで表れるグラデーションにより、奥行きのある表現を実現していきます。



《象嵌八角花瓶「冬麗」》 1990年



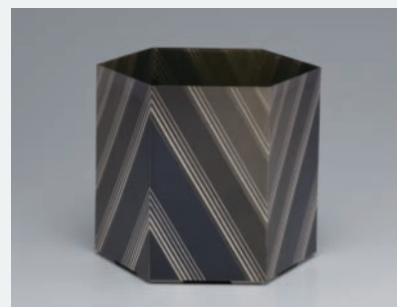
《接合せ二段箱「春麗」》 1990年



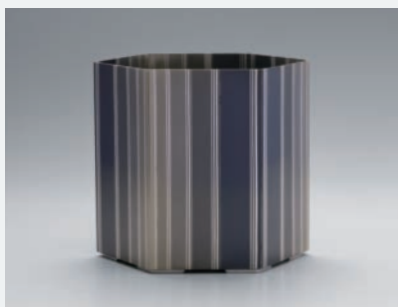
《切嵌象嵌接合せ文箱「季」》 1991年



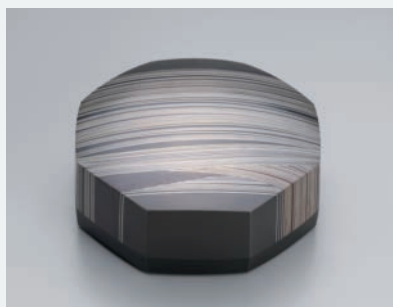
《接合せ象嵌箱「玄」》 1994年



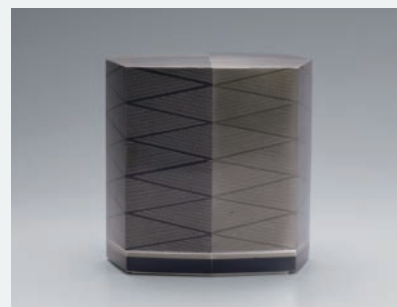
《接合せ六角斜線文花器》 1999年



《接合せ六角線文花器》 1999年



《切嵌象嵌接合せ箱「秋宵」》 2001年



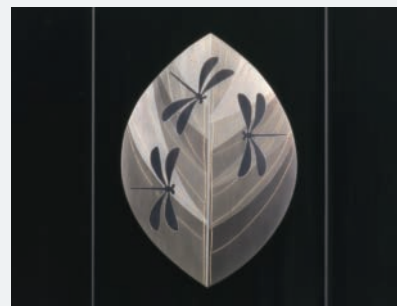
《銀四分一赤銅接合せ綾文箱》 2003年



《切嵌象嵌接合せ二段箱「波映」》 2006年



《接合せ水指「爽流」》 2006年



《切嵌象嵌接合せ額面「蜻蛉」》 2018年

### 3. 極まるわざ

山本は、作品をたくさん制作した作家です。長年、作品づくりを繰り返すうちにわざの熟練度は高まっていき、硬質で色彩に限りのあった金属で、思い描いたことを表現できる準備が整います。色金を複雑に、かつ繊細に接合していくことで、一枚の絵を鑑賞するような、詩情性をおびた表現へと到達します。類を見ないほど複雑で繊細な作業工程により完成した作品からは、山本の技術の高さと豊かな感性がうかがえます。



《切嵌象嵌接合せ金彩箱「椿」》 2008年



《切嵌象嵌接合せ箱「晩夏」》 2010年



《切嵌象嵌接合せ箱「春光」》 2009年



《切嵌象嵌接合せ香炉「静響」》 2017年



《切嵌象嵌接合せ額面「鷺」(ささごい)》 2018年

### \\エピソード/ 小さな作品たち

山本が制作する作品には、手に取りやすく愛らしいものがたくさんあります。魚や蝶、蜚といった生き物がいきいきと表現された小さな皿や箱、気軽に使える酒器や水滴などさまざまな種類が作られています。これらも代表的なわざである「接合せ技法」や「象嵌技法」で作られています、それに限らずいろいろな技法が使われているのが小さな作品たちの特徴とも言えます。緑や青の鮮やかな顔料をのせたものや、トンボなど別づくりの造形をあしらったものなど、チャレンジングな制作姿勢がうかがえます。山本は、日本伝統工芸展など大きな展覧会以外に、個展での活動も活発に行っており、小さな作品たちはそこでよく出品されたものでした。



《銀猫文皿》 1998年



《銀鮎文皿》 1998年



《酒器セット》(酒器1、盃2) 1999年



《切嵌象嵌接合せ小箱「蝶」》 2004年



《銀菱文箱》 2005年



《水滴「ほたる」》 2018年

## その他の寄贈作品一覧

《接合せ匣「春彩」》 1988年

《重ね金切嵌象嵌鉢「冬麗」》 1990年

《象嵌四方花瓶「冬麗」》 1991年

《切嵌象嵌接合せ飾皿「蝶」》 1998年

《接合せ鉢「曙」》 1998年

《銀魚文皿》 1998年

《銀うさぎ文皿》 1998年

《銀すすき文皿》 1998年

《接合せ水指「鳴門」》 1999年

《切嵌象嵌接合せ箱「朝露」》 1999年

《切嵌象嵌接合せ一輪花入「海渡る」》 2002年

《接合せ花入「森閑」》 2003年

《接合せ線文香合》 2003年

《切嵌象嵌接合せ小箱「花畑」》 2004年

《切嵌象嵌接合せ小箱「海渡る」》 2004年

《切嵌象嵌接合せ小箱「ほおずき」》 2004年

《切嵌象嵌接合せ花瓶「ひと1」》 2006年

《切嵌象嵌接合せ花瓶「ひと2」》 2006年

《接合せ水指「星雲」》 2011年

《接合せ香合「秋宵」》 2013年

《切嵌象嵌接合せ額面「お雛さま」》 2017年

《切嵌象嵌接合せ花瓶「木立」》 2017年

《花文一輪花壺》 2018年

《切嵌象嵌接合せ華文小箱》 2018年

《接合せ銀花壺》 2018年

《菊花文香合》 2018年

《切嵌象嵌接合せ額面「季」》 2018年

《切嵌象嵌接合せ箱「椿」》 2019年

以上、52件

## 山本晃氏について

山本は、1944年の山口県光市生まれ。東京デザイナー学院工芸工業デザイン科で学び、その後は音響メーカー・クラリオン株式会社(デザイン室)に入社し、インダストリアルデザイナーとしてカーオーディオのデザインを行っていました。その傍らで、次第にジュエリーデザインに関心を抱き、独学で制作技術を学び始めます。1974年には、故郷の光市で作家活動を本格的に開始します。素材である金属を接合していく「接合せ技法」を中心に、金属板の切り抜いた部分に異なる金属を嵌め込む「象嵌技法」(切嵌象嵌)を巧みに使い、表現の幅を広げました。

また、山本は、金・銀・銅といった金属の配合比率を少しずつ変えて、多様な色金を創出しました。特に、銀と銅の組み合わせによってできる「四分一」ではいくつもの階調を生み出し、豊かな色彩表現を実現していきました。2014年には、技術の高さや制作に取り組む姿勢が認められ、重要無形文化財「彫金」の保持者(いわゆる「人間国宝」)に認定されました。それまでに培った技術は一層飛躍し、金属という無機質な素材に生命を吹き込むような、情感あふれる作品の数々を制作していきました。2024年12月28日に逝去。



作品制作に取り組む山本晃氏

## 略歴

- 1944年(昭和19) 山口県光市に生まれる
- 1969年(昭和44) 25歳 東京デザイナー学院工芸工業デザイン科卒業
- 1974年(昭和49) 30歳 金工創作を開始する
- 1980年(昭和55) 36歳 山口芸術短期大学勤務(平成9年退職)
- 1985年(昭和60) 41歳 日本伝統工芸展初入選(以後連続入選)
- 1986年(昭和61) 42歳 日本金工展初入選(以後連続入選)
- 1987年(昭和62) 43歳 第34回日本伝統工芸展NHK会長賞受賞  
日本工芸会正会員 認定
- 1988年(昭和63) 44歳 第35回日本伝統工芸展奨励賞受賞  
山口県芸術文化振興奨励賞受賞
- 1994年(平成6) 50歳 光駅前モニュメント「輝翔の詩」制作
- 2000年(平成12) 56歳 山口県選奨(芸術文化功奨)受賞
- 2002年(平成14) 58歳 山口県指定無形文化財「金工」保持者に認定
- 2003年(平成15) 59歳 光市教育文化功労賞受賞
- 2004年(平成16) 60歳 デンマーク王立博物館「現代の日本の金工」展招待出品
- 2013年(平成25) 69歳 第60回日本伝統工芸展日本工芸会奨励賞受賞  
日本伝統工芸展60回記念「工芸から KOGEIへ」展招待出品
- 2014年(平成26) 70歳 第19回MOA岡田茂吉賞大賞受賞(「明日の工芸を展望」展招待出品)  
重要無形文化財「彫金」保持者に認定  
中国文化賞受賞  
光市ふるさと榮譽市民
- 2016年(平成28) 72歳 旭日小綬章受章
- 2018年(平成30) 74歳 特別展「彫金のわざと美 山本晃の詩想と造形」展開催(於 山口県立萩美術館・浦上記念館)
- 2024年(令和6) 80歳 逝去

さいごに、貴重な作品を御寄贈くださいました方をはじめ、寄贈にあたり御尽力くださった関係各位に心よりお礼申し上げます。寄贈された作品は、今後、当館での展示をはじめとする美術館活動において有効に活用してまいります。

コレクション展（東洋陶磁・陶芸）

展示室7（陶芸館1F）

み わ が ま

## 三輪窯 —陶の造形—

【会期】2026年1月17日(土) — 4月26日(日)

三輪窯は寛文3年(1663)、萩藩に召し抱えられた三輪忠兵衛利定(初代休雪)に始まります。利定は優れた技量をもつ御雇細工人として藩に仕え、天和2年(1682)に松本村(現・萩市椿東)に居を定めます。そして、元禄13年(1700)には藩命により上洛し、樂家五代の吉左衛門(宗入)より樂焼を学んだと伝えられています。

また、大正から昭和期にかけては、三輪休和(十代休雪)と弟の壽雪(十一代休雪)が、折からの桃山茶陶の再評価の機運に乗って様々な挑戦を試み、萩焼伝統の藁灰釉を改良して「休雪白」と呼ばれる純白で滑らかな釉薬を用いた作品を作り上げました。

約400年の伝統をもつ萩焼の窯のひとつとして、三輪窯は常に伝統を重んじ、それに甘んじることなく新たな可能性を模索し続けてきました。本展示ではこうした三輪窯歴代の作品を紹介し、その卓抜した造形をご覧ください。



三輪壽雪(十一代休雪)《白萩手桶花入》  
1965年 当館蔵

コレクション特別展（陶芸）

展示室8（陶芸館2F）

## 萩焼の現在形

【会期】2026年1月17日(土) — 4月26日(日)

本展は、山口県内で活動する陶芸家の作品を取り上げ、いま、どのような萩焼がつくられているかという視点で紹介するものです。そこで注目したいのが、作陶の経験を長年重ね、活動の幅も広がりつつある40～50代を中心とする作家たちです。彼らは、伝統的な萩焼の素材や技を用いながらも、それにとらわれることなく新しいものを採り入れ、現代の人々の好みや価値観、そして、自分の思い描く感覚をどのように反映していくか、日々試行錯誤しながら作陶しています。茶事に用いられる茶道具、日常生活で使われる器、オブジェなどの美術的表現作品と、彼らが取り組むものは大変多様です。

伝統を大切にしながらも、時代の潮流を独自に捉えながら変わりゆく萩焼の現在を、11名の作家による作品で紹介します。



止原理美 《黒蜥蜴壺》 2019年  
当館蔵(現在形の陶芸萩大賞展V実行委員会寄贈)

# SCHEDULE 令和7年度(1月~3月)

■ 休館日 ◆ ギャラリー・トーク

1

JAN

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
展示室1~6 設備改修工事のため休室 (～ 3/31)																三輪窯一陶の造形一 (1/17～4/26)														
展示室7																萩焼の現在形 (1/17～4/26)														
展示室8																東洲斎写楽「初代中山富三郎の義興妻つくば御前」(1/17～1/31)														
特選鑑賞室																新里明士 差異を繰り返す、まだ Repeat a difference, still (～ 3/1)														
茶室																														

2

FEB

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28			
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土			
展示室1~6 設備改修工事のため休室 (～ 3/31)																三輪窯一陶の造形一 (～ 4/26)														
展示室7																萩焼の現在形 (～ 4/26)														
展示室8																東洲斎写楽「三代目市川高麗蔵の新田義貞 実は小山田太郎高家」(2/1～2/28)														
特選鑑賞室																新里明士 差異を繰り返す、まだ Repeat a difference, still (～ 3/1)														
茶室																														

3

MAR

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
展示室1~6 設備改修工事のため休室 (～ 3/31)																三輪窯一陶の造形一 (～ 4/26)														
展示室7																萩焼の現在形 (～ 4/26)														
展示室8																喜多川歌麿「山姥と金太郎 耳そうじ」(3/1～3/31)														
特選鑑賞室																※														
茶室																														

※新里明士 差異を繰り返す、まだ Repeat a difference, still (~ 3/1)

## ◆ ギャラリー・トーク

〈担当学芸員による展示作品解説〉

いずれも11:00~(30分程度)

- ◆ 1月24日[土] 萩焼の現在形
- ◆ 2月14日[土] 三輪窯一陶の造形一
- ◆ 2月28日[土] 萩焼の現在形
- ◆ 3月14日[土] 三輪窯一陶の造形一
- ◆ 3月28日[土] 萩焼の現在形

※ギャラリー・トークへのご参加には観覧券が必要です。

※イベント詳細については美術館ホームページをご覧ください。

臨時の休館やイベントを中止・変更  
する場合があります。

詳しくは当館ホームページをご覧ください。

お問い合わせ

TEL 0838-24-2400

URL <https://hum-web.jp/>



公式HP

## 設備改修工事のため休室します。

〈陶芸館〉 期間 2025年 9月 1日(月)~2026年1月16日(金)

〈本館〉 期間 2025年12月22日(月)~2026年3月31日(火)

## 表紙について

山本晃《切嵌象嵌接合せ金彩箱「椿」》2008年 当館蔵(山本久代氏寄贈)

箱の形にとらわれず、一面に白椿が表現されています。本作品は、金属を素材にした金工作品であり、まるで描いたような椿は、造形されたパーツを組み合わせることで完成したものです。本作品は、金属を組み合わせる技法である「接合せ」や「切嵌象嵌」を巧みに使って、白椿と黒色で表現された葉をレイアウトして余白を金で彩色しています。主題である椿が引き立つドラマティックな構図は、山本が長年培った技術力とデザイン力により完成した結晶とも言え、本作品はそういった背景も含めて大変味わい深いものとなっています。

## 交通アクセス

### 【新山口駅から】

■ 直行バス「スーパーはぎ号」(約60分)で  
萩・明倫センター下車、徒歩約5分

■ 防長バス(約90分)で  
萩バスセンター下車、徒歩約12分

### 【山口宇部空港から】[萩・石見空港から]

■ 萩近鉄タクシー(乗合タクシー)  
約70~80分(利用前日までに要予約)

### 【JR山陰本線】

■ JR 萩駅からタクシー約7分

■ JR 東萩駅から萩循環まあるバス(西回り)約20分

■ JR 玉江駅から徒歩約20分

### 【自動車】

■ 「中国自動車道」美祿東JCT経由、

「小郡萩道路」絵堂ICから約20分

■ 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



最新情報は公式SNSで



山口県立萩美術館・浦上記念館  
HAGI URAGAMI MUSEUM

〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1 TEL 0838-24-2400 FAX 0838-24-2401

URL <https://hum-web.jp/>

季刊「萩」 令和8年(2026)1月1日 通巻第118号 [発行] 山口県立萩美術館・浦上記念館 山口県萩市平安古町586-1